

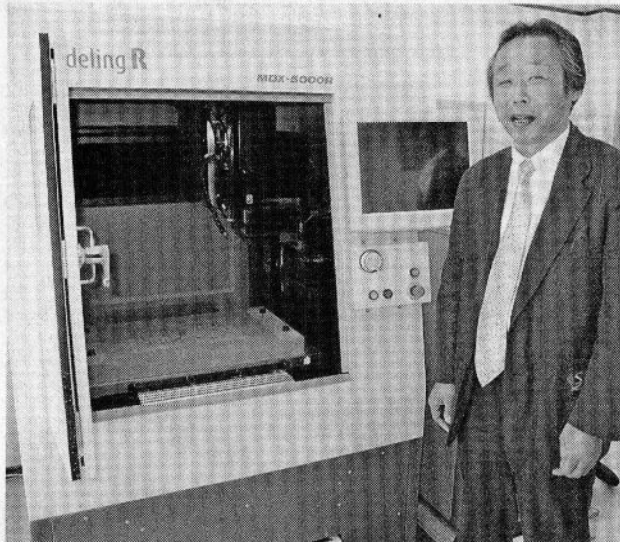
ターボインジェクタ

コンピュータの中央演算処理装置(CPU)向けに応用できる、熱制御技術の受託開発を行うダ・ビンチ(奈良県大和高田市)は、特許を出願した技術が三十件以上に上る技術志向のベンチャー企業だ。企業としてのスタートは、技術開発とはかけ離れた「旅行業」だったが、東謙治社長(50)は「八年前の経営危機をバネに、事業形態の転換を果たした」と振り返る。

主力事業は、冷却や加熱の温度制御に用いる「ペルチェ素子」の受託開発。三年前には、熱変換効率を従来タイプの二倍に引き上げた「二段式ペルチェ素子」を開発し、精密電子部品の一定温度での保管機器などに使われている。東社長が起業したのは平成元年。当初は家族が経営する旅行会社の海外部門を引き継いだ事業形態だった。二年後に湾岸戦争が起ると収入がなくなり、貿易業などにも手

ダ・ビンチ 経営危機バネに事業転換

熱制御の新技术追求



三重県の補助金を受け研究所を新設、新鋭機器を完備した。東謙治社長は「開発に弾みがつく」と期待をかける。三重県名張市のダ・ビンチ名張研究所

を出したが、「零細企業はモノづくりをしないとたない」と痛感するようになった。持ち前のアイデアを生かし、やがて給湯配管を使った風呂場暖房装置や家庭用スチームサウナなどを開発した。しかし、業界大手を相手にした特許出願技術をめぐる裁判費用が、経営を圧迫。公的機関からの助成金も停止されて、平成十年には深刻な経営危機に陥った。「資金繰りも立たず、仕事もなく、時間はかりが過ぎる状況」の中で、東社長が没頭していたのが、「学生どき」に好道に乗った。東社長は「苦しいときの独学が実った。高卒の自分が我流で学んだ。三流の知識でも、多くの分野の知識を持ってたことが開発の成功につながった」と話す。注目を集めたのは、十六年に着手した「マグネチックヒ

きだった物理や化学の勉強」。研究開発に必要な着想を探す目的もあったといい、東社長は「教科書であまり扱っていなかった熱力学の関連分野なら、技術を生み出す余地がある」と気づき、熱制御にかかわる分野へと開発の軸足を移した。

経営改革にも着手した。開発過程の外注費を削る一方、特許技術を抱え込まず、特許売却費を収益基盤にすえることにし、約二十件分、七千万円を手にし、これを債務返済にあてた。

これを機に次第に大手から受注も戻り、受託開発も軌

本社 奈良県大和高田市築山506の6▽資本金 1000万円▽設立 平成元年▽従業員数 4人